歴史と歌

高田　友

第一　歴史　陸士と海兵

軍隊、就中（なかんづく）陸軍の階級制度は、大雑把に「將校・下士官・兵」に分けらる。

海軍の場合は、やや相違ありといへども、ほぼ陸軍に準ずと言ひて大過なからむ。

「將校」は大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉。

「下士官」は曹長・軍曹・伍長。

「兵」は上等兵と一等兵と二等兵。

一方、「士官」といふ呼稱あり。「士官」と「將校」は同義語なりと思ふ人多かれど、聊か趣を異にす。

時代によりて（明治期と昭和）、また陸軍と海軍とによりて、若干定義に差ありといへども、概して「士官とは尉官の別稱」と言ふを得べし。

換言すれば、「將校中にて下位なるランク」といふべけれど、年功序列の「下位」とは、卽ち「若き人々」の謂ひにして、若き女性の海軍軍人に憧れたる時代なれば、「士官」なる呼稱には華やかなるイメージありき。

さて、帝國陸海軍は徹底したる閉鎖社會にして、大東亞開戰に至るまでは、陸軍士官學校・海軍兵學校卒業生にあらずば將校たるは難かりき。（開戰後は、學徒兵の一部を將校に引き上ぐること多し）

さて、いとも不可思議なるは、この兩校の名稱なり。

陸軍士官學校と海軍兵學校はいはば「同格」にして、生徒は通常、現在の高校三年生より大學二年生の年齡。卒業するや就（すなは）ち少尉（士官）に任官す。

然れば、陸軍士官學校なる名はその實態を表してあれど、海軍兵學校は名をのみ聞けば、「兵」を養成する學校を聯想せしめ、士官學校より格下の如くに思はれずや。なほ、「海軍士官學校」なる名稱の學校は本朝には存在せざりき。

實に、誤解の發端は言葉の定義にあり。陸軍士官學校の「士官」は「下位將校」を表す「士官」なれど、海軍兵學校の「兵」は將校（士官）・下士官・兵の「兵」の義にはあらず。

陸軍にも海軍にも「兵科」なる語ありき。

Wikipedia によれば、「兵科とは、狹義には軍隊において軍人に割り當てられた職務區分のうち、主に直接的な戰戰を擔當する區分のこと」との由。

これ、さらに細分せられて、「參謀科・步兵科・騎兵科」（陸軍）などに分かる。

海軍には、兵科と並びて存するは、「（兵科）・機關科・航空科〈飛行科〉」あり、さらにいささか別格なる「軍醫科・歯科醫科・藥剤科・看護科・主計科・造船科・造機科・造兵科・水路科・軍樂科」ありき。

このうちにて、「機關科」（動力裝置を操作する機關要員を養成す）と「主計科」は特段の養成機關存し、「海軍機關學校」「海軍經理學校」とぞ呼ばれたりし。

而して、この兩校に對立する「戰鬪要員養成の學校」すなはち「海軍兵學校」にして、いはば海軍中樞幹部の登龍門なりき。

「兵學校」「機關學校」「經理學校」を「海軍三校」とこそは謂ひたれ。昭和九年の入學者數を見るに、兵學校　二百、機關學校　七十、經理學校　二十なりとぞ。（因みに陸士は昭和十二年卒業生數　四百七十一）

兵學校を卒業すれば、末は大將へ到る道開かる。ただし、「三十歳未滿の大尉または中尉」になる頃、特に選拔せられて「海軍大學校」に入るにあらずば、原則として大將に至るを得ず。

陸軍には「陸軍大學校」あり、ここを卒（を）へたる將校を「天保錢組」とは俗稱す。「卒業生徽章」の江戸の通貨天保錢に似たればなり。

海軍機關學校と海軍經理學校は中將どまり。中將どまりと言ひても、現代人の目より見れば、「ものすごく偉い」と言ふべし。

戰前は、「閣下」と呼ばるるは、軍には少將以上、官界にては局長以上とせられたり。すなはち、中將とは、次官もしく次官一步手前の局長に匹敵す。

軍醫はまた別儀の扱ひあり。陸軍の例にて、森鷗外は「軍醫總監」なる軍醫のトップの役職に就きたりき。ただ、大將にはあらで中將なりき。

軍醫養成の學校として「海軍軍醫學校」「陸軍軍醫學校」存在せしかども、外部（一般大學）の醫學部を卒業したる醫師も、軍醫として出頭することを得たり。鷗外も東京大學醫學部卒業なりき。「東京帝國大學ならずや」と訝り給ふなかれ。東大は「東京大學⇒帝國大學⇒東京帝國大學⇒東京大學」と名を變じたり。鷗外の頃にはいまだ「帝國」なる修飾語は附かざりき。

さて、結局、陸軍士官學校は「士官を養成する學校」なる意味にて名付けられ、海軍兵學校は「兵科の士官を養成する學校」の義にて名付けられたるなり。

米國陸海軍のこれに當たるを United States Military Academy および United States Naval Academy と言ふ。邦譯する際には、前者は「米國陸軍士官學校」なれど、後者は「米國海軍兵學校」とも「米國海軍士官學校」とも言ふ。我國の「陸軍士官學校」は Imperial Military Academy、「海軍兵學校」は Imperial Naval Academy なり。

navy「海軍」の形容詞は naval なれど、army「陸軍」には對應する形容詞存せざるにより て、military「軍事の」を以て代用す。

海軍士官はかっこいいがゆゑに女性にもて、陸軍士官はダサいと輕侮せられたりとの傳說あり。陸軍は全員丸坊主に頭を刈られたり。大將になるも丸坊主なりき。

ただ、この陸軍差別の風評に關して異論あり。抑〻陸軍は海軍に比して總人數多く、街中にて接觸する機會少なからざるによりて、その尊大なる態度目につきやすし。これが爲に國民に疎まる。一方、海軍軍人を一般人の目にするは通常は港灣附近に限らる。これによりて希少價値生じ、制服の白きと相俟つて、神々しく見えたるがゆゑに憧憬の的となりたる而已と。

海軍のかっこよかりしは、外國へ行きて交歡すること多く、かかる際にはスマートならずば嗤笑せられむの虞あればなり。かっこよさに氣を遣ふの要ありきといふべし。

陸軍は軍旗を重んず。最下位の小隊長旗なりといへども、大元帥（天皇）陛下より直接に賜はる。「直接に」といふは、士官學校を出でて間もなき弱冠(twenty)の小隊長、宮中に參內して、御手づから賜はる。然ればこそ重んぜらるれ。廊下にて拜謁を待つうちに、若き小隊長、現御神に咫尺する緊張の餘りに昏倒する例少なからずと言へり。

海軍の軍艦旗も、同じく大元帥より賜る。「太平洋行進曲」は「仰ぐ譽の軍艦旗」と歌ふ。「譽」とは「主上より賜りたる」の謂ひなり。

陸軍にては軍旗を死守せずんばあらず。乃木希典は西南戰爭の砌軍旗を敵に奪はれ、自決せむとしたるを抑留せられて斷念す。

かくて、永久に同じ軍旗を使ひ續け、ボロボロにならむとも廢棄せむは言語道斷なりき。

一方、海軍にては軍艦旗はさほど重んぜられず。艦沈没するときには、軍艦旗はそのまま放置し、海に沈むに委す。對して、最も尊きは御眞影にて、沈没の際には、御眞影を抱きて泳ぐ擔當者（下士官）を豫め定めてありき。

これも、海軍の外國人と交歡すること多きによれるなり。ボロボロの軍艦旗を外國人に見らるるは流石に恥づべしとの意識ありたるが如し。

海軍のスマートなりし儀につき、愉快なる話あり。

中學を卒業して、軍人たらむと志す英才は、陸軍へ行くべしや海軍に進むべきかと懊惱すること多し。その際、左の如くに考へたる生徒少なからずと傳へらる。

「それがし、容顔不細工なれば、海軍にては梲上がるまじ。陸軍へ行くに如かず」と。

眞僞のほどは知らねども、宜なるかな、さなりせば、海軍のかっこよかりしは、人材の資質異なれるによりてなりと納得せらるべし。

なほ、陸軍にても、近衞師團（天皇の親衞隊）に入らむが爲には、將校・下士官・兵を問はず、ハンサムならずば叶はざりき。大元帥陛下の御前に不細工なる面を晒すは憚りありといふにはあらで、近衞師團は儀式に參列すること多きによりて、不細工なる顔にては差し障りありとの意なりけむ。

然則、眞實、容顔不細工なれば海軍にては出世すること難かりしや。

海軍の齋藤實・米内光政・山本五十六抔と、陸軍の東條英機・畑俊六・宇垣一成抔の遺影を比較考證するに一目瞭然、豈此れが俗説の眞實を穿ちたるらむと首肯せらるる所ありといはざるべけむや。

昭和七年より昭和十六年まで軍令部長（軍令部總長）を務め給ひし伏見宮博恭王は、美形を好み給ひき。宮の妃は德川慶喜の娘經子にして、今に傳はる御寫眞を拜するに言語に絶する佳人なり。男も美形ならずば不可なりとの御慮りありたるが如くにて、この宮海軍統帥のトップを占め給ひし時期には、「ハンサムならずば出世するを得ず」との流言蜚語頻りなりしとぞ。

但し、畏れ多くも男色家におはしましきとの記録は傳へられず。

第二　歌

吉魯巴（ジルバ）　又是細雨（ヨウシーしーユイ）

「ジルバ」とは、Wikipediaに徴（ちょう）するに、「社交ダンスの一種。一九四五年（昭和二十年）、第二次世界大戦の終戦とともにアメリカ駐留軍によって日本にもたらされた」との由。

中國語にては「吉魯巴」と音譯す。

今、臺灣の音樂を檢（けみ）するに、「又是細雨」なるジルバの一曲あり。極めて美しく、且つ歌ひ易きに感ずる所有之（これあり）、御紹介仕らむと欲す。（A）に於ては、「原文中國語」と「讀み下し文」を示し、（B）にては、「翻案」を掲げたり。「翻案」とは、此が曲に合せて歌ふを得べく、いはば我が譯詞として作りたる所なり。

（A）の括弧内に（B）の翻案を行書體にて示したるは、「讀み下し文」と「翻案」を對照するの便を圖りたるなり。

タイトルの「細雨」は「小雨」の類。但、別儀「小雨」なる中國語語彙もあり。而して、「又是細雨」は「また是（これ）、小雨」すなはち「また小雨降りてあり」の謂ひなり。

「又是細雨」と打ち込めば、動畫を檢索するを得。この曲に合はせ、（B）の我が譯にて歌ひ給はむことを。

又是細雨

（仮名表記　ン―n　ん―ng　シ―sh　し―x　チ―ch　ヂ―zh　ち―q　ぢ―j）

（A）

又是下着細雨　　ヨゥシしゃーヂョしーユイ

　また小雨下りてあり　（**霧雨降れば**）

使我又想起你　　シウォーヨゥしゃんちーニー

　我をして君を思ひ出でしむ　（**君を思ひ**）

已是落葉的秋季　イシルォイェーディチウぢー
　已にして落葉の秋ぞ　（**袖濡らす宵**）
我却不覺得寒意　ウォーチュェブージュェダハンイー
　我却りて寒意を覺えず　（**冴ゆる野分に**）
靜靜地等下去　ぢんぢんディドんしぁちゅぃ
　ただ靜かに時を待つのみ　（**え耐へぬ嘆き**）
我知道你不是無情意　ウォーヂーダォニーブシウーちん
　我知る君の情意無きにあらざるを　（**恨むるにあらず**）
只是被環境逼　チーシベイホアンぢんビー
　ただ環境に逼まられ　（**宿世悲しく**）
不得已不得已　ブーダイーブーダイー
　已むを得ず　已むを得ず　（**離別餘儀なき**）
我倆才分離　ウォリャツァィフェンリ
　我儕分かるるの時來れり　（**君と我**）
請你請你不要自暴自棄　ちんちんブーヤオズィバォズィチ
　你に請ふらくは自暴自棄することなかれ　（**御身勞はられよ**）
　〈この行にては「你」を發音せざるが如し〉
快回到我的懷抱裡　クワイホエダォウォーディホワイバオリ
　すみやかに我が懷の裡に回到たれ　（**また見ゆる日あらむ**）

（B）
霧雨降れば
君を思ひ
袖濡らす宵

冴ゆる野分に
え耐へぬ嘆き
恨むるにあらず
宿世(すくせ)悲しく
離別餘儀なき
君と我
御身勞(いた)はられよ
また見(まみ)ゆる日あらむ

（令和四年八月十五日受附）